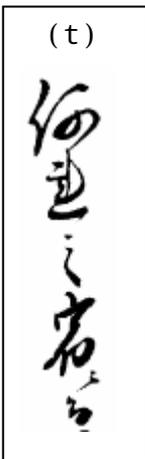


わずかな違いで見分ける



(t)

(t)は最初の何は、「何」ですが、次の連は難しいと思います。この部分から、之が入っているのではないか、という想像はできますが、これは「連」という字で、「れ」というひらがなの代わりに使っています。「何連」で「いずれ」と読んでいます。「連」を「れ」というふうにするのは、割とよく出てきます。後の4文字は復習になりますが、(t)は「何連之宿二而」となります。



(u)

(u)は最初の出は、第22回や第36回などで出てきた「出」です。なお、第34回で出てきた書は「書」という字です。似たような字に見えますが、比べてみるとはっきり違います。「出」の方はノが付いています。

第22回や第36回も見てほしいのですが、やはり「出」の字のときにはノが付

いているのが確認できると思います。わずかなノ一つの違いが、読み分ける決定

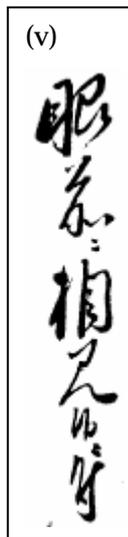
的な部分になっています。次の来は、第23回で来と出てきた「来」という字です。残りの3文字は「仕候義」なので、「出来仕候義」となります。(t)の前から通して読むと「万一何連之宿二而不調法等出来仕候義」(まんいち、いずれの宿にて不調法などしゅったいつかまつり候義)となります。

(v)の最初の眼は、「昭」や「服」にも見えるかもしれませんが、偏は「月」

や「目」に見えます。また、旁は良となっていて、良とはなっていない

ことに注目してください。「昭」や「服」なら良という形で八ネるはずですが

ら、良は「良」という字で、眼は「眼」です。ここでも、わずかな八ネ方の角度の違いが見分けるポイントになっています。次の前は「前」で、「眼前二相見候二付」(眼前に相見え候につき)となります。



(v)

史料(前略)尚又、先宿江右汚等之場所、跡宿より申継之趣、急度差
 状二書載せ可遣、尤御無難之節者、是迄之通可取斗、併御取扱之節、
 万一(七)不調法等(u)、差状二無之上者、不調法八(v)、(w)、勝
 手次第二先々江御添書可仕事つかまつるべき